

気づき合う講座『ダイバーシティ・スイッチ』 「ダイバーシティを強みに変える」開催報告



2018年10月12日(金)にアスト津のみえ市民活動ボランティアセンターにて、今年度第4回目となる気づき合う講座「ダイバーシティ・スイッチ」(主催:三重県)を開催しました。当日は、企業、行政、NPO、個人などさまざまな53名が参加し、講座「『見えないこと』から見てくるもの」と、ふりかえりワークショップを通して、ダイバーシティについて考えました。

ダイバーシティを強みに変える

当日は、ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表の志村真介氏から「『見えないこと』から見てくるもの」というテーマで講演をしていただきました。

ダイアログ・イン・ザ・ダークは、直訳すると“暗闇の中の対話”。参加者は暗闇の会場に何人か入り、視覚以外の感覚や人との関わり方に改めて気づきます。この暗闇の案内人になれる条件は「目が見えないこと」。そう、視覚障がい者です。

ふだんの生活でも視覚による先入観、思い込みのコミュニケーションといった「見えない壁」があります。講座では、ダイアログ・イン・ザ・ダークの事例を通して、壁を越えるために必要な固定観念を外す仕掛けや場のづくり方、参加者・働く視覚障がい者の意識の変化などをお話いただきました。

ワークショップで学びを深める

講演後は、池山敦氏(皇學館大学教育開発センター助教)がファシリテーターを務め、ふりかえりワークショップを行いました。参加者は2~3人でグループになり、講座の感想や気づいたことを伝え合いました。そして講師の志村さんの講演への感想や質問を付箋に書き、志村さんと対話する形で進行了。参加者は「普段考えないことを考えることができた」「いつもマイナスばかりに目を向けてしまっていたことに気づいた」「その人の持つ可能性や能力に目を向けるきっかけになった」「普段“弱み”だと感じる点を、だからこそその“強み”だと感じる事ができた。その視点から物事を見ると世界がより豊かに感じられるようになった」「ダイバーシティを自分にとって一番近い範囲で捉えることができた」などと語り、ダイバーシティについての学びを深めました。



ダイバーシティ・スイッチとは...

三重県では、一人ひとりが尊重され、多様性が受容され、違った個性や能力を持つ一人ひとりがよい意味でお互いに影響し合うことで、相乗効果を社会に生み出す「ダイバーシティ&インクルージョン」の意味も込めて「ダイバーシティ」の言葉を使用しています。「スイッチ」は「切り替え」という意味です。今年度は、社会の多様性を知り、他者との対話でふり返る(視点や考え方を切り替える)講座を通して、自分や地域社会の中にあつた偏見や固定観念に気づき、多様な社会に切り替えていく気づきの場として「ダイバーシティ・スイッチ」(全5回)を開催しています。



講師／志村真介(しむら・しんすけ)氏 ダイアログ・イン・ザ・ダーク・ジャパン代表

1962年生まれ。関西学院大学 商学部卒。コンサルティングファームフェロー等を経て1999年からダイアログ・イン・ザ・ダークの日本開催を主宰。東京・外苑前会場と、大阪「対話のある家」を中心に21万人以上が体験。視覚障がい者の新しい雇用創出と誰もが対等に対話できるソーシャルプラットフォームを提供。2017年からは音のない世界で聴覚障がい者の案内で言葉の壁を超えた対話を楽しむ「ダイアログ・イン・サイレンス」も開催。 http://www.dialogue-japan.org/activitylist/activity_01/

「ダイアログ・イン・ザ・ダーク（以下、DID）」は、完全に光を遮断した暗闇の空間の中へ、8人程度のグループを組んで入り、視覚障がい者の案内（アテンド）により、様々な体験をするイベントです。1989年にドイツで生まれ、これまで世界41か国で開催され、800万人以上が体験しています。

新しい豊かさを生むダイバーシティ

「ダイバーシティ」は、地域や企業を成長させるには必要不可欠な概念です。社会をよりよくするイノベーションのアイデアは、一人ではなくチームから生まれます。最高のチームの源泉は、多様な人たちです。これまでの社会は、「他人と同じ」がいいという固定観念、同質化・均一化した方が効率が良いという考え方で動いてきました。しかし、これからの社会で力を発揮するのは伊賀上野城の「石垣」のような組織です。大小さまざまな形の石が組み合わさることで、同じ大きさの石が揃っている石垣よりも強い。個性を認め合っている組織、地域は強いのです。

ユニセフの調査によると「自分は孤独だと感じる子どもの割合」が最も多い国は日本です。男性への調査でも同様の結果が出ています。これまでの日本は、経済成長することが幸せにつながるという考えで動いてきましたが、社会の仕組みを転換すべきときに来ているのではないのでしょうか。

「（目の）ふじゆうな人は、あたしよりじゆうな力をもっているんだ」--DIDを体験した7歳の女の子の感想です。DIDを体験した子どもたちは、初めての障がい者との出会いで「すごい」人という印象を持ちます。「学ぶための唯一の方法は、遭遇すること」と言われます。これまでの私たちは、キャピタル（資本、お金）を作ることを目的にしてきましたが、これからはソーシャルキャピタル（人と人とのつながり、信頼関係）を繋ぎなおしていく必要があります。

一見、効率的に見える「分ける」ことですが、ダイバーシティを考えると、「分ける」という考えを除くことが必要です。見える世界・見えない世界、聞こえる世界・聞こえない世界…と違う文化が融合することで、イノベーションが生まれます。今FM局と組んで、聴覚障がい者向けのラジオ番組を制作しています。最初は不可能と言われたことも、多様な人たちが集まり、知恵を絞り、壁を取り除くことで、新しいものを生み出すことができます。

発想を転換する二文字「こそ」

これからは誰もが対等に社会参画ができることが必要です。そのためには「できることに目を向ける」と

いう発想の転換が必要です。例えば、「子どもだから…～ない」「大人だから…～ない」など、「〇〇だから…」の後ろにはネガティブな表現が続くことが多く、相手のプラスの面が見えにくくなります。しかし、たった二文字をつけることで、ポジティブに発想を転換することができます。その二文字は「こそ」です。「子どもだからこそ…」と「こそ」をつけることで、できることに目が向くのです。

DIDで働くスタッフの自己肯定感は、働く前と後とは、がらりと変わります。一般的には、目が見えないことは仕事をするときのハンディキャップになります。しかし、DIDの「暗闇」の中では、目が見えないことが一番有利であり、彼らがこれまでの生活で培ったものが宝物となる（目が見えないからこそできることがある）のです。

DIDを通じて目指すもの

DIDは、視覚障がい者の疑似体験をするものと思われがちですが、DIDの暗闇は、お互いの多様性を認め合っていくことができる対等な自由の場なのです。暗闇の中では、健常者と視覚障がい者は、対等に会うことができ、「健常者が障がい者を助ける」「障がい者が健常者に助けられる」という立場は逆転します。そこで協力し合い、助け合いながら過ごすことで、その場にいる全員が相互に対等な関係性をつくることができます。このような多様性を認める経験や気づきは、日常生活での自分を変える力があります。そしてその人たちは、それぞれがいる場所で半径3メートルの社会を変える可能性を秘めている人たちです。DIDを体験するのは一度に8人が上限であっても、その8人が学んだことをそれぞれの日常の中で発信していったらそれは社会を変える大きな力になります。DIDは、これまでの「助ける/助けられる」などの固定観念を転換し、対等な人間同士のつながりを促進することで、「人を変える」という変換装置としての役割を担っていきたいのです。

志村さんは「ダイバーシティとは、外の世界のことでありません。まずは、自ら隣の人と対話して、信頼関係を築くこと。それがスタートになります」と語りました。

多様性を知る経験や気づきが、今まで見えていなかったことを見るものに変え、自分や半径3mの世界を豊かにする始まりとなることを感じられる講座となりました。

★「三重県がめざすダイバーシティ社会」とは…

「性別、年齢、障がいの有無、国籍・文化的背景、性的指向・性自認などにかかわらず、一人ひとりが違った個性や能力を持つ個人として尊重され、誰もが希望をもって日々自分らしく生きられる、誰もが自分の目標に向けて挑戦できる、誰もが能力を発揮し、参画・活躍できる社会」と定義しています。